神輿を守り、文化をつなぐ

筑西市しもだて子供みこし連合会

今年の羽黒神社夏季大祭下館祇園まつりで、４年ぶりに筑西市しもだて子供みこし連合会（大畑芳道（おおはたよしみち）会長）連合渡御が行われました。「子神輿連（こみこしれん）」の愛称で親しまれている同会は、現在、20 町内 32 基の神輿で構成され、年間をとおして下館祇園まつりの開催に向け尽力されています。

今回、伊達組と共に下館祇園まつりを盛り上げる筑西市しもだて子供みこし連合会の想いや活動を紹介します。

筑西市しもだて子供みこし連合会のみなさんと関係者（大畑会長前列左から４番目）

【問】観光振興課（本庁３階）
☎20－1160

子神輿連の始まり

戦後昭和20年代頃、子神輿連の前身が数町内で発足し、経済が大きく発展した昭和30年代以降には、各町内で競うように子ども神輿が作られました。当時は担ぎ手が多く、神輿を取り合うように担いでいたそうです。昭和40年代後半には町内同士の横の連携を図るため、地域で団結し連合渡御を行うなど、まち全体を盛り上げていこうと結成されたのが、現在の筑西市しもだて子供みこし連合会です。

伝統文化はつなぐもの

大畑会長は「現在は少子高齢化や人口減少などにより、神輿を出せない町内が出てくるなど、昔と同じような形で祭りを守ることは難しいが、下館祇園まつりを次世代につなぐことはできる」と話します。今から22年前、大畑会長が所属していた下館青年会議所では、そのことに危機感を覚え、平成13年から子神輿連と各町内の協力を得て「子ども神輿体験事業」を開催し、市内外から子どもの参加者を集いました。今年は約１００人が集まり、神輿に肩を入れ、祭りを体験しました。

「一昔前は町内の人しか神輿を担げないという時代だったが、現在は多くの人に神輿を担いでもらい、子ども達が大人になって地元を離れても祇園まつりには筑西に帰ろうと思ってもらえるように、かけがえのない体験をしてほしい」と大畑会長。昔とは形を変えながらも、祭りの文化を次世代へ継承していくという熱い気持ちが伝わってきました。子神輿連は、来年の下館祇園まつりに向け、歩き始めました。